

飯島賢二の『恐縮ですが』…一言コラム』

第 266 回 アグロフォレストリー (Agroforestry)

2008.7.13

今回は、内村悦三農学博士の論に共鳴して…

『アグロフォレストリー (Agroforestry)』という言葉がある。『農業 (アグリカルチャー = Agriculture)』と『林業 (フォレストリー = Forestry)』、ふたつの言葉を合成した言葉で、日本語は「混農林業」と呼んでいる。『アグロフォレストリー』の定義は、『同じ土地で、ほぼ同時に、樹木と農作物 (あるいは家畜) を組み合わせることで、総合的・長期的な生産力の向上を目指すシステム』。熱帯雨林の生態系の特徴である生物多様性になって、なるべく多彩な生物の生育を組み合わせる考え方がアグロフォレストリーであり、熱帯での持続可能な経営形態として注目されている。有限の資源である「土地」を、総合的に利用していこうとするこのシステムは、森林破壊が問題となっている熱帯地方で、現在特に積極的に導入されている。

たとえば熱帯アメリカでは、ココナツやマメ科樹木の下にコーヒーやカカオを植えこむことが実験され、熱帯アフリカでは、樹木の下にヤマイモ、トウモロコシ (メイズ)、カボチャ、マメなどが植えられ、高密度に植栽された樹林地内でいかに合理的に太陽エネルギーを利用するかのシステムが考えられてきた。もともと日本では、林業を担っていたのはほとんどが農業の人であり、林業と農業はかなり近い関係にあった。古くは東北地方で、クヌギやナラを植えた下で軍馬を飼う「混木林」があったが、これもまさしくシルボ・パストラルと言えるだろう。

林業と漁業の複合もある。「アクア (Aqua) フォレストリー」とばれるもので、マングローブ林の下でエビの養殖を行う、あるいは「魚付き林」や、土手に柳や桜を植える「河岸林」、これらはすべて木が庇陰樹となってそこに魚が集まることを利用して漁業を行うという、これも「アグロフォレストリー」の一種である。

今、「食」の問題が注目されている。人口問題、エコ環境、代替エネルギー、食糧自給率、農業経営等々複眼的視野から「食」の問題が論じられている。「アグロフォレストリー」を実施する事で、同じ土地から農作物と木材の両方が、長期にわたって得られるようになり住民の収入は安定する。また、樹木が養分を補給した土壌の一部を農作物が吸収するという循環作用が永続的に行われ、長期にわたって土地の保全ができる。樹木の存在によって微気象の調整が可能になる。さらに、植える樹種によっては、熱帯林も蘇る……

人類は所詮、地球上に一番あとから入ってきた生物なのだから、自然に逆らわず、自然と共生していく工夫をしなければならない。林業と農業、あるいは漁業を共生させ、土地を合理的に有効に使うことで、生態系の循環をスムーズにする「アグロフォレストリー」の考え方、人と自然の共生に貢献し得る大切な思想として、これからの社会に益々注目されていくに違いないと思っている。

参照 : <http://www.nishigaki-lumber.co.jp/himorogi/bun/19.htm> より